

昭和55年10月14日(火) 時事解説 第3種郵便物認可

●十月号の論壇から

ますます波紋よぶ清水幾太郎論文

鈴木幸寿 (東京外国語大学教授)



ある程度予想されたことだが、やはりこう大々的に話題としてとりあげられると、つくづく清水幾太郎という人物について関心を深めざるをえない。というのも、八、九、十の三ヶ月にわたって、「日本よ 国家たれ」核の選択」が論壇をにぎわしているという現象は、こしばらくなかつたからである。おそらく、清水の言によれば、間もなく単行本になるとのことであるから、まだまだ物議をかもす?かも知れない。タイミングとしては、鈴木内閣の下での来年度予算編成に当たって、防衛費の特別扱いが真剣に組上(そじょう)にのぼってきたことも見逃せない。

九月号では猪木正道が、また大江健三郎がいずれも矛先を向け論難している(本欄五十五年八月二十九日付)のに続いて、十月号では『中公』で福田恆存が「近代日本知識人の典型、清水幾太郎を論ず」という批判の大論文を書いているのが注目される。当のご本人は、いささかのん気というるか、前論文の「あとがき」に代えてという名目で『諸君』に「節操と無節操」を書いて首尾一貫した信念を述べている。

このように問題の質からみて甲論乙駁(おつばく)大変なことになることがわかっていながら、いわばタブーに手をつけたことで世の耳目を集めたのは、清水にしてよくないえたことかも知れない。そして論難している人びとが、決して反体制論者や革新的思想の持ち主ではなく(のつけからこの種の問題提起に対して全くこれを無視しているからか?)猪木にしても福田にしても、タカ派といえど語弊があるかも知れないが、そういったニュアンスで世に受け入れられている有識者なの

がまた面白い。猪木のばあいはかなり手きびしい批判だったが、福田のばあいは「私の読後感には不快感の一語に尽きる、怒りではない、むしろかつての友人、先輩に対する同情を交えたけんお感である」とやや感情的ともいえる口調ではじまっている。

「節操とは自分の経験への忠実」

読み方は人さまさまだが、福田は通読後思いつくままに書き散らした欄外の書き込みまで紹介している。例えば「説明、説明、また説明のつじつま

合わせ↓破たん」「防衛の対象は日本ではなく自分自身」「自己防衛↓自己正当化↓自己劇化↓身元証明」といった調子である。全体的にみて福田は、清水の人となりを論じている風が強い。だからといって精神分析学者のように分析しているわけではなく、清水の論理の展開の矛盾を昔からの清水を知る者として突いている。

この批判を読んで清水がむきになって反論するかどうかは別問題だが、どうやら「いい気になるな」と言いたいらしい。「わが人生の断片」という著書のなかで「しばしば私の事が引き合いに出され、あたかも私が氏と同じような心境で戦時中と戦後の一時期を過ごしたかのごとき印象を与えているので、もう遠慮はしないことにした」と半ば挑戦的なのも余程頭にきたからだろう。

一般的な判断からすれば、戦後「清水教」という教祖として多くの人々に直接・間接影響を与え続けてきたオビニオンリーダーが、平和運動、反安保闘争から一転して「核の選択」に至る足跡をどう世に理解させるかは、大変勇気のいることでもあるしむずかしいが、これをあえて試みたこと



熱海から東京の関川病院へ移送された千石イエスについて、賛否分かれるのが当然かも知れない。否のほう割合声高く叫ばれているので福田論文も目立っている。

ところが、本人の『諸君』の「節操と無節操」はもとと自費出版（本年五月）からスタートし、しかも三千部作って関係方面（防衛庁幹部から自衛隊幹部クラスと日本青年協議会）に配布したが、思ったとおりか思いがけずか？その反響の大きさに当人がおどろいたという話から始まって、無節操との非難にこたえようとしている。コトバのあやとばかり言えないが、「私は節操とは『自分の経験への忠実』と考えている」といった定義の仕方では、「いずれにしろ、この本当に新しい経験に忠実であろうとすれば、大なり小なり考

え方が変わってくる。動き方が変わってくる。読みかけた本を投げ出して、新しい本を読み始めることもあろう。それをとがめる人と冷たい関係になり、新しい友人を得ることもあろう」と述べ、さらに「二十年間、私は一步一步証拠を残しながら生きてきた。『節操』とか『無節操』とかいのは、人間が一生に一度か二度しか使えない重たい言葉である。私の残した証拠は何巻かの書物になっていて、いつでも入手出来る。この何巻かを通読してから、使いたいなら、重たい言辞を使うがよい」とひらき直ったかのような言辞をはいていられなき非難にこたえているのが印象深い。

たしかに思想の遍歴には屈折があり、一概にきめつけることは問題がある。やはり日本の代表的オピニオンリーダーであるだけに反響も大であったのだから、まだ続くと思われる論議をもう少しみたらうで整理すること、無視的態度をとっていないとすれば、ただ「右傾化だ」「無節操だ」と批判しないで、革新を自称する側からひとつまともな批判をしてほしいものである。

得体の知れない教祖（まがい）と娘

別な意味で世を騒がせた事件に「イエスの方舟」事件がある。まだ記憶にあたらしい特異な事件であるが、この事件をめぐる『中公』は特集「新保守主義の実像を問う」という共通テーマのなかで「儀礼ごっこ時代—社会病理一九八〇—」（小田晋）を、『文春』は「手記「イエスの方舟」

事件」（岩川隆）、そして『世界』はやはり特集「現代社会論の試み—バラダムの転換を求めて—」のなかで山口昌男が「「イエスの方舟」の記号論—マスメディアと関係の構造化について—」を執筆している。

もちろん、それぞれ違った角度からの分析を試みていて、それなりに特色をもっているが、この種の事件（他にも起こったばあいには、またか」といったことで取りあげられないことはないのだが）は、まずニュースとしての価値があることによって世間の注目を浴びる。問題はニュースとしてのマスメディアの報道の仕方やその意図が大きな反響を及ぼした点である。

たしかに、愛する娘が得体の知れない教祖（まがい）の元に走って、集団的生活を続けているというのだから、耳目を集めるのも当然といえば当然である。

山口論文は、サブタイトルに示されているように、マスメディアとの関係に焦点を合わせているのに対し、小田論文は、この「方舟」のみならず、前述の清水論文をも含めて、現代社会の病理的側面を照射している。

大変興味深いのはむしろ岩川論文である。岩川はこの問題が表面化する前から、被害者（子女の親兄弟親せき）側のよき？相談相手であったという体験をふまえて、これを作家的立場から告白風に記している。未完なので次号をまたないと何ともいえない面もある。



東京・巣鴨少年センターから自宅へ帰る信者たち

山口論文は、サンケイ新聞の報道とサンデー毎日の論調とのギャップを中心に、「狂信集団」と「方舟」を断定したことについて小田教授の批判をもおこなっている。「中でも小田晋筑波大教授

の次の意見は、かねて『日本文化史のなかの狂気』についての教授の一連の論考を敬服している筆者（山口）には、愚論としかいえないような予断と偏見に満ちた調子の低いものである」という、小田のサンケイ新聞に寄せた声を非難している。

山口は、この「方舟」を騒ぎ立てるマスメディアの姿勢の不当性を指摘し、いわば自発的な「コミニタス」にすぎない点を強調している。「今日の社会のように、構造がますます形骸（けいがい）化しそれが人間により大きな生きがいを与えるより、人のアイデンティティを断片化して、形骸化した規範に従わせる傾向が強い場合に『コミニタス』への潜在的なあこがれは強く……」と、現代という時代の落とし子であって異とするに足らぬゆえんを説いている。

さらにこれを実証するために、ルイス・ブニエルの「ナサリン」（戯曲）とのコントラストをたくみに整合させている。山口の着想はやはりなかなかの才人たることを思わせるが、実は「いちいち分析し反論するのがあほらしくなるような駄弁」とまでさげすんだ小田論文を読んだとしたら、これほど極言できなかったらうと思われる。

「方舟」と一般家庭の崩壊の関係

小田は、「方舟」擁護派にみられるゆきすぎた弁護を指摘しつつも、「今日の時代精神ないし社会心理を象徴する重大な意味をもっている」とい

った認識に立って、(1)外面的には整っていて、対社会的には何も問題はない——と思われるような家庭でも、じつは共通して一つの特徴があること、それは父親や父親としての役割を果たしていないし、母親の方では、母親としての役割を必死につとめているつもりでも、その働きがゆがんでいるということ(2)信者たちは、家庭内での孤立感から連帯を求めて、あるいは父親像を求めて、一種の疑似宗派である「方舟」の中で共同幻想の充足をはかったこと——の二点を挙げている。

(2)の点は山口も重視しているのであるから非難すべきものはないはずである。こうした論点に加えて小田は、現代社会のもつ違和感や正体の知れない不安、あるいは緊張のなかで、これを解決しないばあいには「無意識の心の仕組みを動員するのであって、これを防衛機制という」といった定義づけのもとで清水論文にまで言及しているのは、福田の清水批判とも関連して興味がある。

小田は小田なりに、新聞のインタビュで答えたことと論文とは区別しているとも思えるし、山口もめくじらを立てることもあるまい。むしろ前に戻るが、清水が「核の選択あとがき」の末尾で「私の感謝すべき人びとのリストも限りなく長い。……軍事科学研究会のメンバー各位は言うに及ばないが、研究会発足以前から、著書論文を通して、私に貴重な教示を与えて下さった方々の一部をアイウエオ順で挙げ、猪木正道、海原治、神谷不二、久住忠男、久保卓也、高坂正堯、阪中友

久、佐瀬昌盛、福田恆存、三好修等の諸氏に心から感謝の意を表する」と述べ、猪木と福田の名が挙げられているのは皮肉といえど皮肉な話ではないだろう。

テクノロジの害悪とパトス

各誌の目玉商品である特集に目を転じてみると『中公』の「新保守主義の実像を問う」が比較的最とまっている。『世界』の「現代社会論の試み——パラダイムの転換を求めて——」は、テーマ倒れの感が強い。というのも、現代社会を論ずるばあいの分析視角あるいは分析ワク組みを提示しようとしたにしては、必ずしも網羅的ではなく、やはり総合誌の限界をみせつけているからである。

むしろ『中公』のばあいも、「新保守主義」と名づけてはみたものの、この「新」の意味するものが果たしていかなるものかはあきらかにされていない。こうした両者の物足りなさはあるが、これらのなかからいくつか紹介しておきたい。

『世界』の山口論文以外に、中村雄二郎の「近代化を相対化するもの——唐木順三の近代批判とパトスの知——」と中野収の「現代日本の大衆社会——大衆社会論への懐疑——」がある。

中村論文は哲学者であるがゆえに近代化によって人間性を見失ってきた状況への告発と同時に、人間のパトスへの依存、わかりやすくいえば生身の人間のもつ「知」を確立することの肝要性を指摘している。これが一つのパラダイムの構築につ

ながるのかも知れない。

「技術文明あるいは近代科学の原理への対抗的な価値原理とは何か。それは近代科学の知が事物に技術的に働きかける能動の知、アクションの知であるのに対して「パトスの知」といふべきものである。ここでパトス（Passion）とは受動、情念、受苦などの意を含んでいる」と述べて、近代文明や技術が人間に与えた罪悪を糾弾するため身体的・体性感覚的知の重みを説くのである。他面で習俗や型として定着した「制度」にも批判の目を向け、こうした「制度化」によるいわば人間疎外の状況からの脱出をはからねばならないともいう。いかにも哲学者らしい発想だが、つきつめていえば、社会と人間の問題に帰着する。

社会が維持・存続・発展していくために必要とされたテクノロジ（ひいては人間に幸福をもたらすものとしてきたテクノロジ）が人間を非人間化してしまうという現実、そこでの制度による統制や抑圧との兼ね合いこそが問われている。したがって、とくに目新しいパラダイムの構築とはいいい切れないのではない。

マスの中で人間は個性を失うか

むしろ中野論文のほうが現代社会の鋭い分析に迫るものをもっている。いまさらといえなくもないのだが、一九五六年ごろから盛んに言われ出した特殊二十世紀的社会構造としての「大衆社会論」は、かなり多くの人びとの関心を集めて議論され

た歴史をもっている。中野は、こうした理論史のなかで、いつしか定説めいた命題、すなわち、「大衆という集団のなかでは、必然的に没個性化する」という命題について、その真偽をあきらかにしようとしている。

大衆（マス）のなかで個性を失った人間は、エリートの操作の格好の対象になるばかりではなく、主体性喪失者のサンプルのごとき評価がなされてきた。果たしてそうなのか。大衆文化論に盛り込まれた論理も全く同じであって、同調行動に走る（走らざるをえない）という見方がどこまで通用するかという疑問を投げかけている。

中野はこれをはっきり否定する。論文の目的もこれを実証しようとするところにつきる。「集合行動のなかですらひととは個別的・個性的たりうると考えている。それを明らかにしたい」というのがそれである。そのためにはごく身近な、日常生活のなかから証拠立てをするのがよいだろうという配慮がなされている。大量現象として典型的な服飾の流行、購買行動にみられる非同調行動、また流行歌（手）への同調がみられるがごとくみえつつ、実は主体的選別がなされているという指摘（「山口百恵論」の多種多様性、多彩性が例証されている）は、通説化することへの一つの警鐘でもあると考えてよい。

高く評価したい中野論文

中野のような発想は、いささかジャンルが異な

るが、かつてマスコミュニケーションとマスとの間に定説化した考え方の一つに「大衆はマスメディアとの直接的つながりによって、マスメディアの絶対的影響を受けるものだ。したがってマスはつねに受動的ならざるをえない」というのがあった。これに対して、「コミュニケーションの二段の流れ」という説が発表され、メディアから発信されたメッセージは、つねに大衆(受け手)に直接伝達され影響を与えるよりも、受け手内部のオピニオンリーダーの解釈(変容・補強)を経過するというのが正しいとされるに至ったことがある。

中野の説は、流行現象をかなり仔細に観察するなかで、大衆行動の非同調性に注目したことはユニークであるが、このことは「二段の流れ」と同じく当たり前のことも知れない。ただこのことが、現代の若者文化に主として観察されるという指摘は重視してよい。将来の「文化環境」との関連から、ひいては政治行動にまでいくかどうかがきわめて注目し値する。この意味では中野論文の持つ意義を高く評価したい。

伊藤律生還特集は早とちり

大山鳴動ネズミ一匹という観を深くしたのが、元日本共産党幹部の伊藤律の三十年ぶりの帰国問題である。「文春」の緊急座談会「生きていた現代史の謎 伊藤律の『爆弾』」も、『潮』の特集「帰ってきた伊藤律」の尾崎秀樹論文「ゾルゲ事

件と伊藤律」、西野辰吉論文「歴史に沈んだ男 私を知る伊藤律」も、せっかくの企画に迫力がない。

黙して語らずは「死人に口なし」と同じである。したがってどうも歯切れが悪いという印象が強い。

座談会にしても、伊藤隆(東大助教授)、増山太助(元日共・都委員長)、藤井冠次(元日共黨員、紙上参加)、安田勝雄(共産党史研究家)に司会が立花隆を配してはみたが、肝心の点になるとボヤけてしまい、何となく隔靴搔痒(かつかそうよう)の感がある。憶測推測が入ってしまう。歴史の証人が語らないうちに、やや独断と偏見が入ったかたちでことを論ずるのはいかなるものであろう。

「伊藤番」というのが新聞社にいるのかいないのかは知らないが、ニュースバリューは今のところ消えてしまっている。当の共産党内部で一体どうなっているのか、たまたま筆者が職業柄「赤旗」を購読しているので気をつけてみているが、現状は完全に無視、あるいはこれも黙して語らずの姿勢といつてよい。

歴史の書き換えが必要になるためには、何か言ってもらわねばならないし、またそれを裏づけるものがなければならぬ。したがってここ当分は、散発的に話題にはなっても、そう騒がれることもないであろう。ということは、伊藤律生還をめぐる問題を総合誌あたりで取りあげたことがいささか早とちりではなかったのかという気がするのである。

あとあと尾を引く防衛問題

防衛論議が盛んであるためかどうかかわからないのだが、偶然なのでしよう。「世界」が「共同ルポ」『防衛大教育考』(三好徹)を、そして『潮』が「江田島 今昔物語」(大庭みな子)を掲載している。いずれも作家のルポである。

日本旧海軍のエリート養成地としていまだに懐旧の情をそそる江田島、その一角五十二万平方メートルを擁した兵学校跡の取材は、旧海軍軍医の子女としてこの地に生活したことのある大庭にとつてはより今昔の感が深いわけである。したがって、美化しようとはしないが、何やらそれらしきふん囲気をただよわせながらの筆の運びではある。

他方三好のルポは、やはりクールである。防大生とひざを交えての対話のなから、かれらの意識までキャッチしようとする姿勢のなかには、潜在的にせよ、この種大学校への先入観が介在しているのではないか。かつての陸士、海兵とは違うんだ、とはいって見たものの、「似ていなくもない」と言うのはそうした証拠ではないか。大学生側は、すでに歴史を重ねてきたためか、かつてのような「軍国主義のコリカタマリ」でないことも三好は認めている。

三好自身たしか終戦の時は十四歳であるから軍歴はない。してみるといささかこうした自衛隊最高幹部養成機関についてとことんまでメスを入れることができるかどうか。

いずれにしても、今後防衛論議がよりかまびすしくなった段階で、肝心の防衛の担い手はだれかに論議が集中してくることも考えられる。この時に、徴兵制などをも含めて再度ジツクリ考察することが出てくるかも知れない。

ルポ「洞爺丸」の教訓

ルポものとしては、ベテランの上前淳一郎が、「洞爺丸はなぜ沈んだか」を書き、この大海難事故の解明に迫ろうとしている。何せ二十六年前のこと、ほとんどの人びとが遠い昔のこととして記憶にすらよみがえってこないのだが、台風の接近から沈没まで、荒れ狂う波とうにほんろうされ、いかにこの窮地から脱出すべきかの状況などドキュメンタリー映画をほうふつさせるような筆の運びで、一気に読ませてくれる。

かつてタイタニック号が史上最大の海難事故を起こし、これが映画化されたこともあったが、洞爺丸については、久しく忘れられていただけに、今あらためて読んでみて感銘を覚えている。タイタニック号は一九一二年、氷山と衝突して沈没しているのに対して、洞爺丸は台風による遭難事故であるから質的に異なっている。自然の力という点でこれをあなどれない教訓を残している。

航空機事故、列車事故など、あるいはガス爆発事故等が起るたびに、警鐘が鳴らされ、それなりに心構えを新たにするものの、二度と繰り返してはならないことをこのルポは改めて教えてくれた。

地震に警鐘鳴らす二つのルポ

同じルポでも、「潮」の「特別企画」「巨大地震の『都市・原発』災害」のほうは、これから予想される災害をどう防ぐか、どう対処するかに焦点を合わせている。「東京サバイバルのかくも厳しい条件」(枝川公一)と「東海地震と浜岡原発の『危険な関係』」(三木逸)がそれである。

東海地震については地震予知連絡会をはじめ、おそまきながら徐々にその対策を国レベルで考えはじめ、先ごろは総合演習が行われたりした。東京都防災訓練にも力を入れている。しかし、枝川ルポにも見られるように、いざ本番という時にどうなるか、東京が生き残るために課された条件はまことに厳しいものがあることを、このルポは教えてくれる。それだけにやはり対策の不備、現状の不十分さが指摘されてみると、かえって不安感が増大してしまう。早急に何とかならないだろうかと、といったあせりも手伝って、その先にはむしろあきらめすら頭をもたげている。「どうにかなるさ」「起こったら起こったときの話」といった一種のなげやりの態度も地震についてはささやかれている。一人一人の心構えや努力の積み重ねがこの際大きな意味をもつだけに、教訓的というよりは、繰り返し現実起こった場合の行動パターンと各家庭の準備を強く訴えていくべきだろう。関心の高さと対策の実行とが比例して進まねばなるまい。

三木レポートは浜岡原子力発電所の地震時にお

ける危険性をかなり科学的に説明しているの、おおよその感じはわかるのだが、地質学者あたりからの知識によって書かれているので、素人には若干理解しにくい点もあるのが惜しい。しかし、警鐘を鳴らすという点では、枝川ルポと同列に論じうるものである。

印象深い文革見直し論

『中公』には、特集でそのほかにみるべき論稿があった。松岡英夫の「日本保守主義の五大特色」などがそれである。これ以外に読みごたえのあった論稿には、「中国よ、今こそ文化大革命を書いている中嶋嶺雄論文がある。三度目の訪中で、近代化路線をひた走る中国(民衆)の現実の姿に接して、かつて文革の不毛性を鋭く指摘して中国研究家の本領を発揮した中嶋が、今度は文革批判者ではなく、文革を現時点で見直すべきことを強く提言しているのが印象深い。

お隣韓国情勢については、むしろ『世界』の継続的なキャンペーンを盛り込んだ和田春樹の「全斗煥体制と金大中氏の裁判」(普通軍事法廷での死刑求刑前の論文)をはじめ、『諸君』は独占インタビューと称して「全斗煥將軍は語った。金大中は嘘つきだ」を掲載して真っ向から対決しているかのように見えるし、『中公』は重村智計「全斗煥対金大中の十ヵ月」など、相変わらず関心の高さを示しているのだが、裁判が続行される限りおそらくにぎやかな論議もまたたえることはないであろう。